

伊 豆 特 産

絹さやえんどうと施肥

静岡県農業試験場

河 森 武

はじめに

静岡県伊豆半島の沿海地域では、主として矮性(わいせい)赤花絹さやえんどうが栽培されている。これは明治初期にさや・実とり兼用で栽培されはじめたものであるが、冬どり栽培が有利なことから、夏涼しく、秋が長く初霜期が遅く、かつ降霜期間の短い伊豆半島南端の沿海地域を中心として、明治末期にその栽培面積が急増した。

戦後は再び栽培面積が急速に増加し、海岸地域の無霜地帯から降霜の遅い山間地帯に産地を拡大し、現在では栽培面積が300ヘクタールあまりとなり、伊豆地域の重要産物となっている。

えんどうは連作をきらう作物で、一回作付けすれば5～6年の休閑が必要であるといわれている。前述したような自然の気象的適地を求め、処女地から処女地へと耕地を求める遊牧的な栽培が行われている。

したがって栽培法自体もかなり素朴なものがあつたが、近年、特産絹さやえんどうの栽培改善のための努力が地道に続けられ、見るべき成果が挙げられつつある。ここでは施肥改善を中心とした事例について紹介してみよう。

絹さやえんどう栽培地の土壌条件

えんどう栽培の適地条件としては、土性は中粒質で保水力が強く、かつ排水良好であることが必要である。

砂土のような粗粒質土壌は収穫時期は早まるが、肥料切れが早く品質も低下しやすく、収量も少なくなる。

粘質な土壌では収穫時期が遅れがちであり、湿害にかかりやすく病害の発生も多くなるので、高畦などによって排水をはかって土壌の乾湿の差を少なくし、かつ土壌を膨軟にし通気をよくするために、有機物の多用をはかることが必要である。

えんどうは酸性に弱く、中性ないし微アルカリ性の土壌を好む作物なので、酸性土壌は不適であり、最適な条件としてはpH(水浸液)6.0～6.9とい

われている。またマメ科植物なので燐酸の必要量が大きく、燐酸の効きやすい土壌が好ましく、火山灰土壌のような場合には、燐酸の増肥が必要である。

肥料の施しかたと肥料の種類

肥料は燐酸の効果も大きいですが、絹さやえんどうは実とり栽培ではないので、窒素の効かせかたが大事である。

一度肥切れさせると、追肥をしても回復しにくいので、肥料切れにならないように注意することが必要である。

また燐酸、加里を十分に施してあると初期生育が良好になり、たとえ寒害にあっても、回復が早いということをまず念頭においてほしい。

第1表には標準施肥量の1例を示した。また第2表には、元肥に用いる配合肥料の配合量を示した。

第1表 標準施肥量の1例 (伊豆地域・kg/10a)

土 壤	窒 素		燐 酸		加 里	
	元肥	追肥	元肥	追肥	元肥	追肥
黒ぼく土壌	13	7	20	0	10	5
一般土壌	13	7	30	0	10	5

黒ぼく土壌では燐酸の効果が大きい反面、窒素がよく吸収されて過繁茂になりやすいので、窒素はやや少なめにして、燐酸成分を多くすることが必要である。絹さや1号および3号は、この点を考慮して成分比を異にしているようである。

そのほか一般的な注意としては、早播きする場合(8月20日以前)の施肥量は2～3割多目にし、遅播きの場合(9月中旬以後)には逆に2～3割の減肥とする。

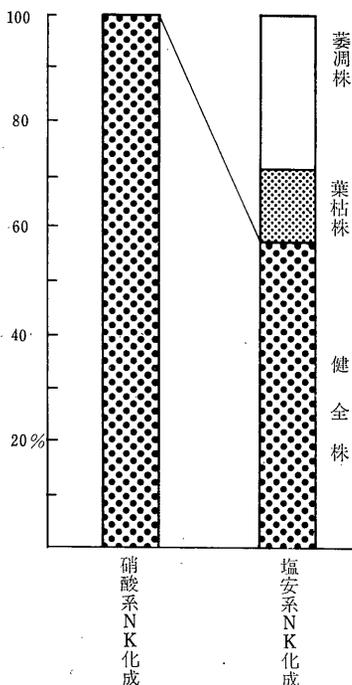
また早生型の品種では、2～3割の増肥をすることが必要であるとされている。連作が避けられない場合も、標準量よりも多肥にする方がよい。

絹さやえんどうは肥料障害を受けやすく、一度肥料障害をうけると回復は困難であるから、肥料障害をうけないように肥料の施しかたには十分な注意が必要である。

とくに、標準量よりも増肥する場合には、深溝施肥とか、播種する位置を施肥位置からはずすとか、肥料の形態を変えるとか、あるいは増肥分を、芽出し肥として施すといったような工夫が必要である。

追肥を施す場合には、肥料が茎葉にかからないように注意しなければならない。追肥の場合でも肥料の種類によっては肥料障害をうける。第1図は、塩安系NK化成と硝酸系NK化成を追肥した場合の、障害のうけかたのちがいを示したものであるが、塩安系肥料の障害はかなり大きい。

第1図 肥料の種類による障害のうけかたのちがい (8月23日追肥・8月26日調査)



野菜に対する窒素肥料としては、硝酸態窒素とアンモニア態窒素が、一定の比率で含まれていることが望ましいということもあるので、絹さやえんどうに対する追肥用肥料としては、肥料障害も少ない、硝酸態窒素を含んだ肥料がよいということになった。

そこで使われたのが硝酸系NK化成 E989であったが、これは吸湿性があるて使いにくいという欠点があったので、吸湿性もなく、燐酸の効果も期待しようということで選定されたのが燐硝酸加里「新緑」である。

第2表 絹さやえんどう元肥用配合肥料の配合割合

絹さや 1号		絹さや 3号	
原料名	配合割合	原料名	配合割合
尿素	7.5%	C D U	30.0%
重焼燐	60.0	尿素	5.0
硫加	12.5	重焼燐	40.0
燐加安48号	20.0	硫加	10.0
		燐加安48号	15.0
3要素成分量(kg) 100kg	5.5-25.0-9.0	3要素成分量(kg) 100kg	13.1-17.0-7.7

燐硝酸加里「新緑」は3要素の保証成分が21-6-7であり、窒素21%のうち11.5%が硝酸態、9.5%が硝酸態の高度化成である。現在では、前述した元肥用の絹さや配合とセットにして実用化されている。

8月上旬に絹さや配合1号を元肥に施用した場合には、追肥に燐硝酸加里「新緑」70kgを、9月中旬から11月中旬までに3回にわけて施用する。

また絹さや3号を元肥に用いた場合には、この中に緩効性窒素のC D Uが含まれているために、追肥の燐硝酸加里「新緑」は、10月中旬に20kgを施用するような施肥法が奨励されており、良い成果をおさめつつある。

農業就業人口6%減・これまでの最高減少率

農林省が本年1月1日現在で行なった農業調査の結果によると、農業就業人口は前年に比べ6%も減り、899万3,000人となった。

さらに農業就業人口のうち農作業に主力を置いている、基幹的農業従事者は7%減り、659万人に落ち込んだ。

いずれもこれまでの最高の減少率で、脱農業が急速に進んでいるとの見方を裏付けている。

また農業就業人口の女性化、老令化もひどく、女子に60才以上の男子を加えた割合は、農業就業人口の70%弱にのぼっている。

農家の総戸数も前年より1.8%減り、516万9,000戸になった。これは前年の減少率1.5%や41~46年の年平均減少率1.1%を上回っている。このうち専業農家は6%、第1種兼業農家は11%減ったが、逆に第2種兼業農家は5%増え、農家全体に占める割合は専業が14%、第1種兼業が27%、第2種兼業は59%となった。